

## 健康で豊かなスポーツライフを実現しようとする子どもの育成

小 学 校 廣岡 哲也、濱田 圭、藤田 奈美  
研究協力者 日野 克博、糸岡 夕里（愛媛大学）  
東村 英憲（愛媛県教育研究協議会）

### 1 主題設定の理由

豊かで便利になった現代社会に生きる私たちは、生活のあらゆる場面で体を動かすことが少なくなっている。特に、今の子どもは、都市化や少子化などの影響を受け、遊びの三間（時間・空間・仲間）が減少して運動不足になっていること、運動をする子どもとしない子どもの二極化、体力の低下傾向などが指摘されている。体育科の授業の中でも、運動技能に大きな差があったり、意欲的に運動に取り組むことができない子どもがいたりする。そういった背景には、私たち教員が、子どもに運動の本質的な楽しさを十分に味わわせられていないこと、運動に対する自信を持たせられていないこと、失敗して友達から責められるかもしれないといった不安を感じさせてしまっていることなどがあるのではないだろうか。そういったことに鑑みると体育科の授業が負う責任は大きい。一方で、「友達に教えてもらったらできた！」「もっとやりたい！」このような子どもの姿や発言が見られたら、子どもは運動の魅力を感じ、仲間とのつながりの中で伸びていくことに喜びを感じている証であろう。そして、活動を通して充実感を得た子どもたちは、「次はこんなことをしてみたい！」と、更なる活動を求め学習空間を広げていく。それを自分たちの手で成功させた時、学びは更なる深まりを見せ、心に深く刻まれるのである。私たちは、これこそが体育科における「深い学び」を実現している姿であると確信している。

この「深い学び」を実現する過程を積み重ねていくことによって、体育科の究極目標でもある「健康で豊かなスポーツライフ」を実現しようとする力の育成につながっていくと考え、本主題を設定した。

### 2 子どもと共に学びをつなぐ「体育科」の授業づくり

#### (1) 体育科における「子どもと創る『深い学び』」

##### ア 子どもの心が動く教材・教具の工夫

主題設定の理由で述べた「体育科における『深い学び』」を実現するためには、子どもの心の動きが伴った学びである必要がある。私たちは、子どもの心が動き、主体的に活動するために、教材が持っている本質的な魅力を教師がしっかりと理解し、性差や障がいの有無、運動能力差等にかかわらず、誰にとってもやさしい運動になるように教材・教具を工夫、開発することが大切であると考え。また、子どもが関心を寄せていることや普段の遊びなどつながりを持たせるなどして教材との出会わせ方を工夫し、子どもの「おもしろそう！」「やってみたい！」という心の動きと連動させながら、「よりよく動けるようになりたい」という自分なりの課題を設定できるようにしたい。

##### イ 子どもの思いや願いを受け止める単元の展開

体育科における「深い学び」を実現するには、大前提として教師が子どもの思いや願いをしっかりと受け止めることが大切である。子どもが、今どのような活動を求めているのか、どのような手立てを必要としているのか、そういったことに、教師はアンテナを張り巡らせながら単元を構想、展開していかなければならない。それを念頭に置き、子どもとの対話や子どもからの提案、授業を振り返った体育ノートなどを大切にする。

子どもが感じている課題が次の学習課題になったり、やってみたいと思ったことが実現したりすることで、子どもの心は充実し、自分の思いや願いが実現できたという達成感や満足感を得ることができるだろう。そして、子どもが教材や他者と豊かにつながるよう工夫し、次への活動を求めていけるように単元を展開していくことで、「子どもと創る『深い学び』」を実現していくことができるのだと考える。

## (2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て（学習材・他者・自分自身）

### ア 学習材とつなぐ手立て（主に「見方・考え方」との関連）

体育科の見方・考え方について、以下のように学習指導要領に書かれている。

運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること。

「出会い」「挑戦」「感動」それぞれの場面で、見方・考え方を働かせる場面を設定することで、運動やスポーツを多様に楽しむことができるようにする。この際、子どもたちの思いや願いを受け止めながら場面を設定したり、運動やスポーツとの多様なかわり方を教師が意味付けをしたりすることで、より意味のある活動にすることができる。そして、そういった活動を繰り返し行うことで、子ども自らが見方・考え方を働かせ、多様に運動を楽しむことができるようになっていくのだと考える。

昨年度、第2学年で実践した「ボッチャ」の実践を例に挙げる。初めてボッチャと出会ったのは、特別支援学校に招待され、ボッチャの試合を行った時である（「出会い」の場面）。初めての試合なので、当然勝てなかったのだが、そこから子どもたちは「うまくなりたい！」という思いを持って練習に励むようになった（「挑戦」の場面）。そして、技能面で上達してきたことを実感した子どもたちは、「特別支援学校の人たちを招待してリベンジしたい！」と言い始めた。そこで教師からは、「招待するに当たって何が必要か」を問うたところ、子どもたちから大会の司会進行や試合の審判、大会を盛り上げるための応援等が挙がり、必要感を持って準備を進めていった。大会当日、子どもたちは、準備してきたことを存分に発揮し、大会を成功させることができた（「感動」の場面）。単元が終わった後の子どもたちの振り返りからは、運動を「する」だけでなく、応援すること（みる）や審判をすること（支える）で大会ができたことから、そこに楽しさややりがいを感じた子どもたちもたくさんいた。また、一般的に「障がい者スポーツ」とされているボッチャであるが、単元を通して特別支援学校の子どものたちとかかわりを深め、ボッチャの面白さを味わった子どもたちは、「ボッチャは障がい者のためのスポーツではなく、みんなで楽しめるスポーツ」という意識も芽生えていた（知る）。

以上のように、見方・考え方を働かせる場面を意識して単元を構想し、子どもの気付きや思いを受け止めながら展開することで、子どもにとってその学習材とより深くつながることができ、心に深く残るものとなると感じている。

### イ 他者とつなぐ手立て（主によりよい「対話」の在り方・方法）

他者とつなぐ手立てとして、子どもが対話に必要感を感じ、自然と仲間とつながることができるように学習環境を整える。例えば、仲間とかかわりながら解決することができるような学習課題を設定したり、一人の力だけでは解決できず、みんなの力を合わせないと解決できないような運動場面を設定したりする。子どもが自然と仲間とのつながりを求めるような工夫をすることで、「みんながいたからできた！」「一緒に運動する

って楽しい！」という思いを引き出しながら、できるようになる喜びを感じることができるようになりたい。

### ウ 自分自身とつなぐ手立て（主に自覚のための自己評価の方法、過去・現在・未来）

体育科では、単元を通して体育ノートを使用し、子どもが自分自身の学びについて振り返ることができるようにする。「出会い」の場面では、新しい単元が始まるに当たり、まず過去の学習を振り返るようにしている。体育科においては、必ずしも全ての子どもが新しい単元に対して前向きに捉えているわけではないだろう。ただ、そういったことも含め、子どもの思いを丸ごと受け止めて単元を構想し、単元が終わる頃に全ての子どもに「楽しかった！」「またやりたい！」という前向きな思いを持てるようにすることが教師の重要な役割だと感じている（過去の自分自身とのつながり）。

「挑戦」の場面における体育ノートには、授業で学んだことの他に、①自分の成長、②友達とのかかわり、③次への目標とそれに対する自分なりの解決方法等を書くようにし、単元内においても、前時まで（過去）と本時（現在）とを比べた自身の成長、次時以降（未来）の自分はどうか等振り返ることができるようにする。さらに、毎時間、数値による自己評価（資料1）を行い、体育ノートに蓄積していくことで、これまでの自分の学びを振り返りながら単元を進めていくことができる。

また、教師は、体育ノートの記述や自己評価の数値の変化としっかり向き合うことで、次の授業での指導に生かすことができ、子どもの思いや願いをより深くくみ取った授業を目指すことにつながると考える（現在の自分自身とのつながり）。

評価方法：それぞれの質問に対して「はい・どちらでもない・いいえ」で自己評価する。（毎時間）

1 楽しかったですか。
2 今まででできなかったこと（運動や作戦）ができるようになりましたか。
3 自分のめあてに向かって何度も練習できましたか。
4 友達と協力して、なかよく学習できましたか。
5 友達とお互いに教えたり、助けたりしましたか。

資料1 自己評価カード

そして、「感動」の場面では、「出会い」「挑戦」の場面で考えたことや身に付けたことを振り返り、それらを生かして、子どもの思いや願いを叶えることができるような運動の場（例 リーグ戦、発表会、交流対決等）を設定する。また、「仲間と協力して課題を解決することのよさ」を感じることができるようにすることで、「努力してできるようになってうれしい」「仲間と一緒にがんばったからできた」「次の活動もみんなでがんばりたい」というような、運動に対する前向きな思いにつながり、次の活動に自信を持って取り組んでいくようになる。ひいてはそれが、「健康で豊かなスポーツライフ」へとつながっていくのだと考える（未来の自分自身とのつながり）。

### (3) 「子どもと創る『深い学び』」における（指導者）評価

「出会い」「挑戦」「感動」の学習過程における指導と評価を次のように行う。

※（下線部は、「見方・考え方」にかかわる箇所）

	「深い学び」の実現につながる姿（●）	「学習材」「他者」「自分自身」をつなぐ指導の方針（○）	主に評価する三つの資質・能力【・】
出会い	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <u>運動との多様なかかわり方を理解し楽しもうとしている。</u></li> <li>● 教材や教具、題材と出会うことで、「分かるようになりたい、できるようになり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ <u>運動には多様なかかわり方があることを紹介する。</u>（学・自）</li> <li>○ 友達と思い切り体を動かし、やさしい運動（遊び）の場を設定する。（学・他）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 過去の経験を振り返り、運動に前向きに取り組もうとしている。また、<u>運動の行い方や運動のこつを自分なりに理解し</u>、次時以降の見通しを持とうとしている。</li> </ul>

	<p>たい」「友達と一緒にがんばりたい」という思いや願いを強くしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分に合った課題を設定し、学習の見通しを持って取り組もうとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 運動に自信を持ち、学習の見通しを立てて活動するために、体のどこを意識したら運動しやすいか等、子どもが困っているポイントや子どもに合った運動のこつを見定めて声を掛ける。(学)</li> </ul>	<p>【主体的に学習に取り組む態度】</p>
挑戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <u>運動を「する」楽しさだけでなく、「みる・支える・知る」の視点からも運動とかかわる楽しさを感じることができている。</u></li> <li>● 学習資料の提示やスマールステップでの学習によって、「これならできそうだ」という思いを持続させながら夢中になって活動に取り組んでいる。</li> <li>● 何度も挑戦することによって少しずつ「できるようになってきた」という充実感を得ることができている。</li> <li>● 友達との励まし合いやアドバイスの交換、応援し合うことによって、「自分は人に受け入れられている」「人の役に立っている」という思いを持つことができている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ <u>運動に多様にかかわったり、友達と自然に伝え合ったりできるような場を設定したり、声掛けをしたりする。(他)</u></li> <li>○ <u>運動を「する」楽しさを味わうために、こつや作戦、動きづくりのヒントとなるような声掛けをしたり、学習資料を提示したりする。(学)</u></li> <li>○ <u>運動が「できるようになる喜び」を味わうために、よい動きを称揚したり、最後まで粘り強く運動できるよう励ましたり、よりよい動きになるよう助言したりする。(自)</u></li> <li>○ よりよく個人やチームの課題を解決するために、具体的な手立てや条件を示す。(他)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもが自分なりにこつを意識して運動し、技能を身に付けることができる。</li> <li>【知識・技能】</li> <li>・ 自分なりに、個人やチームの課題を捉え、その解決に向けて、個人やチームで考えを出し合い、工夫しながら活動する。【思考・判断・表現】</li> <li>・ 授業中、友達にこつを教えたり、自分の考えを伝えたり、友達の意見を受け入れたりしている。また、体育ノートでの振り返りでそういった記述が見られる。</li> <li>【思考・判断・表現】</li> <li>・ <u>運動を「する」楽しさや「できるようになる喜び」を十分に味わうことができている。</u></li> <li>【主体的に学習に取り組む態度】</li> </ul>
感動	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「努力したらできた」「友達と一緒にしたらできた」「みんなとだからがんばれた」という気持ちになり、次への意欲や自信を持っている。</li> <li>● <u>体育科で学んだことが、休み時間や学校外での活動でも行われている。</u></li> <li>● 体育ノート等に、成長の喜びや達成感を味わっている発言や記述がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学習したことを想起させるような言葉掛けをしたり資料を提示したりする。(自)</li> <li>○ 学習したことを生かして活動できる運動の場を設定する。(学・自)</li> <li>○ 振り返りの場で蓄積した動画を見せることで、自分や友達の成長を実感できるようにする。(他・自)</li> <li>○ <u>体育科で身に付けたことが実生活や他教科等で生かされるように教科等横断の単元構成を工夫する。(自)</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ チームや学級で、既習の学習を生かしながら次の学習に向けての工夫を考えようとしている。</li> <li>【主体的に学習に取り組む態度】【思考・判断・表現】【知識・技能】</li> <li>・ 「みる」「支える」の視点で、<u>運動とかかわる楽しさを感じている。</u></li> <li>【主体的に学習に取り組む態度】</li> </ul>

これらのことを意識しながら実践を重ねていくことで、子どもの心が動き、子どもが学習材や他者、自分自身とのつながりを大切にできるような「深い学び」を実現していきたい。  
(濱田 圭)